

---

# 死神

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

死神

### 【Nコード】

N5956C

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

元寇後の鎌倉。ある武士の枕元に不気味な男がいた。彼が言うこととは。聊斎志異からヒントを得ました。

## 第一章

死神

鎌倉時代の話である。丁度元寇が終わった頃であろうか。鎌倉はやつと平穏さを取り戻しつつあつたが幕府の中ではきな臭い権力闘争の匂いがはじめていた。そんな時期であつた。

丘道実朝はその日寝ていた。だが寝ている間に誰かが声をかけてきた。

「これ、実朝」

「!?!」

その声に気付き顔を声がした方に向ける。身体は自然と起きていた。

「わしを呼ぶのは誰じゃ？」

「わしじゃ」

見ればそこにはやけに痩せた男がいた。今にも倒れそうな程やつれていて古い粗末な服によれよれの帯を締めている。一応は礼装のようだがとてもそうは見えない格好であつた。

「誰じゃ、御主は」

「迎えじゃ」

彼は実朝の問いに対してこう答えてきた。

「迎えよな」

「左様、明日伺うからな。挨拶に来たのじゃ」

「客か」

「そんなところじゃ」

男は答えてきた。

「実は案内するところがあつてな」

「案内とな」

実朝はそれを聞いてその太く濃い眉を動かしてきた。

「何処にじゃ？」

死神

「それは明日わかる」

何故かここでは言おうとはしない。何かを隠している感じであった。

「明日な」

「明日なのか」

「一応それは覚えておいてくれ」

「うむ、わかった」

実朝はまずはそれに頷いた。だがそれでも釈然としないものが心に残る。

「しかしのう」

「何じゃ？」

男はその言葉を受けて彼に問うてきた。

「どうにも御主が普通の人間には思えぬのだが」

彼はそれを感じていた。男から感じられる雰囲気はどうにも人間のそれとは感じられなかったからだ。今それを男にもはっきりと言った。

「どうじゃ、そこは」

「まあそれも明日じゃ」

「また明日か」

「そうじゃ。ではな」

そこまで言うのと姿を消した。実朝が目覚めた時には部屋には誰もおらず当然ながらあの男はいてはいなかった。

だが釈然としない思いは残る。それで彼は玄米を山盛りにした武士の朝食を済ませると寺へ参ることにした。そこで経を読んでもらい不吉なものがあるならばそれを払ってもらおうと思ったのだ。

そうしてもらってから馬で家に帰る。その途中でふと鎌倉の街の入り口に新しい店ができているのに気付いた。

「何の店であるう」

「薬屋だそうです」

町人の一人が馬の上にいる彼に答えてきた。

「薬屋か」

「はい、何でも宋から直接持つて来たものらしくて。それで今皆集まっているのですぞいます」

宋は元により滅ぼされている。その時に日本にまで流れてきたものであるうか。実朝はそんなことを考えながら話を聞いていた。

その町人はさらに述べる。見れば店の前に老いも若きも町人も農民も武士までもが集まっている。その中に彼が見知った者もいた。

「おや」

その彼に気付き馬を下りた。そして声をかけた。

「浅野殿ではござらんか」

「おお、丘道殿」

口髭を生やしたやけに怖い顔の男がそれを受けて彼に顔を向けてきた。見れば浅野正久であった。鎌倉で執権家に仕える武士で実朝の同僚である。所謂身内人である。

「薬を売っていると聞いたが」

「うむ、それで見に参ったのじゃ」

正久は彼の言葉に答える。

「宋の薬をな」

「ふむ」

「どうやら日本のものよりも凄いらしい」

「そうであるう。やはりそちらではな」

宋といえば文化も技術も当時の世界において他を寄せ付けないものがあつた。その為そのものと言えば何でも飛ぶように売れたのである。今風に言うならば漢方薬であるがそれを売っているのである。

「丘道殿も見ればどうか」

「そうじゃな」

実朝はその話を聞いて頷いた。

「それではな」

それに応えて店の中を覗いてみる。するとそこには一人の瘦せた

男がいた。

「なっ」

実朝はその男の顔を見て絶句した。何とそこにいるのは昨夜夢の中で会った男であったのだ。

「いらっしやいませ」

「どういふことじゃ」

実朝は思わず呟いた。

「これは一体」

「どうされました？」

「どうしたもこうしたもない」

彼は言う。

「そもそも」

「そもそも？」

「いや、いい」

ここで彼は思い直した。あれは夢の話である。夢の世界とこちらの世界は違う。それで何かを言ってもやはりそれは違うのだということを読み出したのである。

「では何か貰おうか」

「これなぞ如何でしょうか」

男は一つの小さな壺を出してきた。その外観は黒いごく普通の小さな壺だ。しかし実朝はそこに不吉なものを感じていたのである。しかしそれは口には出さない。

「それが」

「はい、どうでしょうか」

「ではそれを貰おう」

鎌倉武士として迷いを見せるわけにはいかなかった。武士というのは迷ってはならない、すぐに決断を下さなければならぬ。彼はそう考えているからだ。

「はい。きつとお役に立てるか」と

「それで何の薬なのじゃ？」

彼はそれを問うた。

「よかつたら教えてくれないか」

「気付け薬です」

「気付け薬か」

「御身体が悪くなった時にこれを飲まれば。すぐに回復致します」

「左様か」

「はい。それでは」

「うむ」

その薬を買って家に戻る。ここまでは何事もなかった。

しかし家に帰って暫くすると。急に身体がだるくなってきた。

「！？？どういことだ」

実朝はそれに違和感を覚えた。何が何なのかわからない。

とりあえず彼は今買ってきた薬に目をやる。男の話を思い出したのだ。

「身体が悪くなった時に飲めばよかつたな」

それを思い出しすぐに口に入れる。その後で布団の中に入って休んだ。暫くすると眠りに入りそこでまたあの男と会ったのであった。

## 第二章

「言った通りじゃったな」

「そうだな」

実朝は男に応えた。応えながら彼に対して自分が今思っていることを述べた。

「御主のことがわかったぞ」

「ほう」

男はその言葉を聞いて言葉をあげてきた。だがその調子は決して高いものではない。ぼそぼそとした様子である。

「ではわしは何じゃ」

「迎えではないのか」

彼は男に問うた。

「どうじゃ。違うか？」

「如何にも」

男の方でもそれを認めた。今度は隠しはしない。

「わしはな。死神じゃ」

「左様か」

実朝はそれを聞いて布団に寝たまま頷いた。

「やはりな」

「驚かんのか」

「武士は何時死んでもおかしくはないもの」

彼は言う。

「それでどうして死神が怖いのじゃ？」

武士は戦場で戦うのがその務めだ。先の元寇では実朝は幾度も死線を潜り抜けている。そんな彼だから死に対しても怖れてはいないのである。

「どうじゃ、そこは」

「ふむ、見事じゃ」

死神はその言葉を聞いて感心したように頷いてみせた。

「武士だけはあるな」

「その言葉有り難い。それでじゃ」

彼は落ち着いた様子で話を続ける。

「わしは死ぬのか？」

「いや」

返事は実朝の予想したものではなかった。死神は首を横に振って言うてきた。

「今は死にはせぬ。わしは御主に会う為に来たのじゃからな」

「死なぬのか」

「見てみよ」

死神は実朝にこう言うてきた。

「わしの場所をな」

「場所を！？」

「そうじゃ」

見てみれば死神は足元にいた。それは彼にもわかった。

「それがどうしたのじゃ？」

「ここじゃ」

死神はまた言った。

「わしが枕元にいれば死ぬということなのじゃ」

「では足元にいればどうなのじゃ？」

「助かる」

彼は答えた。

「それはわしが決めることではなくてな。運命が決めることじゃ」

「左様か」

「左様、必ず一度はその者の枕元に立つ」

つまり人間は誰でも死ぬということである。それを言ったのである。

「それが運命じゃ」

「そうか」

実朝はそれを聞いてやけに感心した。しかしそれでもなお何か腑に落ちないところがあった。

「しかしな」

「何じゃ？」

「あの薬屋じゃが」

「あれはわしじゃ」

彼は答えてきた。

「わしに他ならぬ。ああやって死ぬ者がいるかどうか見ておるのじや」

「そうだったのか」

「一つ教えておこう」

死神は実朝に対して述べてきた。

「死神は一人ではない」

「何人もいるのか」

「それこそ数え切れない程にな。そして医者や坊主になってあちこちにおる」

「そこで迎えに行くべき者を探しているのか」

「そういうことじゃ。わかったか」

「うむ」

実朝はその言葉に頷いた。今までの話で完全にわかった。

「成程な。そうだったか」

「ではな。また何時か来る」

「うむ、またな」

話が終わった。そして別れの段階になった。

「しかしな」

死神は最後に述べてきた。

「わしを見ても怖がらぬとはな。大した肝っ玉じゃ」

「何、わしも武士じゃ」

実朝はその言葉に豪胆に笑ってみせてきた。

「そんなことでいちいち怖がるか。人が死ぬのはわかっている」

「ほう」

死神はその言葉を聞いて笑みを浮かべてきた。陰気な顔であるが笑みは浮かんだ。

「それで怖れぬのじゃな」

「死ぬなら戦場で死にたい。それだけじゃ」

「見事なものよ。それこそ武士じゃ」

「わかつたらな。また最後に会おうぞ」

「わかつた。では戦場で会うことを期待しておるぞ」

「またな」

こうして二人の話は終わり死神は去った。実朝は次の日には元気な顔で起き上がっていた。

朝起きて朝食と軽い稽古の後でまた馬に乗って街に出た。そのままたあの薬屋に向かったのである。

見れば死神がまだいた。相変わらず薬を売っている。

彼はそれを見た。昨日とは違い心中は穏やかに。しかしそれを知る者はいない。

ふと目が合った。そこで互いに笑みを浮かべ合った。

「またな」

「はい」

それだけであつた。しかしそれだけで充分であつた。二人は別れる。昨日鎌倉でそれなりの数の者がなくなつてると聞いたがそれが運命の結果なのだと実朝は知っていた。それについて何も思うところはない。死んだ者に救いがあればいいとは思っているにしろだ。

「それも運命のうちだな」

達観を今感じた。死ぬのも運命だしそこから何処かへ行くのもまた運命なのだ。彼は今それを思いながら馬に乗り死神の側を去るのであつた。己の運命をただ進む為に。

死神

2  
0  
0  
7  
·  
1  
·  
1  
·  
1  
0

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5956c/>

---

死神

2009年3月24日10時59分発行